4-4 「総合教育力」構築の大切さ

ベネッセ教育研究開発センター　小林 洋

はじめに

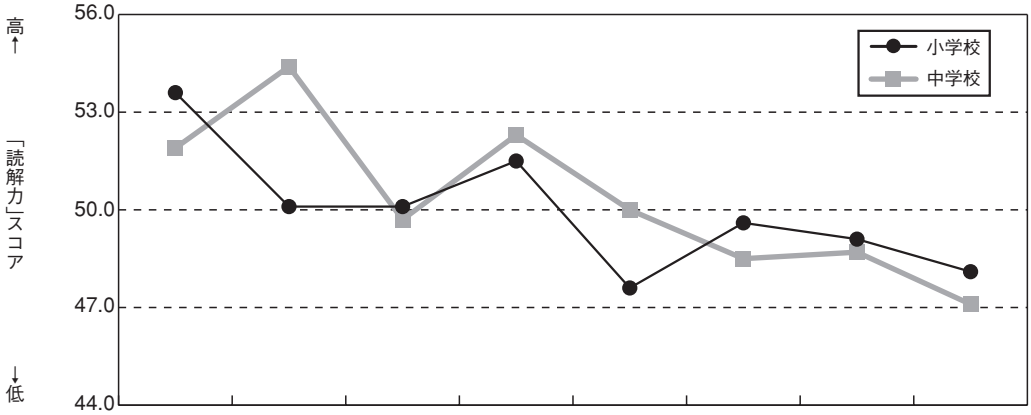
前回の「基本調査2004」の報告書で、子どもの教科学力は、教師の指導力、家庭の教育力ならびに学校の経営力がともに平均以上のパターンで最も高く、反対に、その3つがともに平均未満のパターンで最も低いこと、また「学びの基礎力」についても、その3つが平均以上のパターンで偏差値が50以上、ともに平均未満のパターンで偏差値50未満となる結果を示し、子どもの教科学力や「学びの基礎力」を伸ばすためには、教育力も総合的に構築される必要性を検証した。本節では、前回と同じ手法を用いて、子どもの「読解力」と、教師の指導力、家庭の教育力、ならびに学校の経営力の3つのパターンとの関係を調べ「『読解力』は、『総合学力』と同様に、教師・学校・家庭の総合的な働きかけのもとに育成される」という本調査の仮説の一つ（基本仮説3）を検証する。

「総合教育力」の発揮により、子どもの「読解力」は一層高まる

小5では、教師の指導力、家庭の教育力、学校の経営力がともに高いパターンで「読解力」が最も高い

図表4－4－1は、「教師の指導力」、「家庭の教育力（ＤＩＰ）」ならびに「学校の経営力」の各総合スコアの平均以上（○）・平均未満（×）によって、子どもを8つのパターンにグルーピングし、それぞれのグループに属する子どもの「読解力」スコア（偏差値）をグラフにしたものである。

図表4－4－1　総合教育力のパターンと「読解力」との関係



	パターン	A	B	C	D	E	F	G	H
総合教育力	教師の指導力	○	○	○	×	○	×	×	×
	家庭の教育力(DIP)	○	○	×	○	×	○	×	×
	学校の経営力	○	×	○	○	×	×	○	×
「読解力」スコア	小5	53.6	50.1	50.1	51.5	47.6	49.6	49.1	48.1
	中2	51.9	54.4	49.7	52.3	50.0	48.5	48.7	47.1
パターン分布（%）	小5	15.8	11.5	10.6	10.9	14.3	11.5	12.7	12.7
	中2	18.6	6.4	15.1	12.6	4.4	12.7	12.1	18.2

パターン化するにあたっては、前回同様に調査対象校数の制約により、同じ学校の子ども（同じ「学校の経営力」の影響にある子ども）が、「教師の指導力」と「家庭の教育力」のパターンの違いに応じて、「学校の経営力」の判定の同じ4つのパターン（図表4－4－1のA・C・D・GまたはB・E・F・H）に分散されており学校単位でのパターン分けとはなっていないことに注意してほしい。

なお、この図表での「教師の指導力」と「学校の経営力」の平均以上（○）・平均未満（×）の判定は、今回の調査で「読解力」向上のための取り組み項目として新たに設定した設問の回答結果に基づいている。すなわち、この図表での「教師の指導力」は、「読解力」向上のための「日常的な学習指導」と「教育環境の整備・充実」の項目、そして、「学校の経営力」は、「『読解力』向上を支えるマネジメント」の項目で表されているもので、それぞれ、前回提唱した教師の指導力の「ＦＡＮモデル」と学校の経営力の「ＭＯＲＥモデル」とは同じものではない（設問内容詳細については、図表2－3－1・図表2－3－2、ならびに、図表2－4－1参照）。

図表4－4－1から、小5については、教師の指導力、家庭の教育力、学校の経営力の3つがともに高いパターンＡで、最も子どもの「読解力」スコアが高くなっている。ただし、教師の指導力のみ平均以上というパターンＥが、教育力すべてが平均未満というパターンＨよりも子どもの「読解力」が低いスコアとなっている。このことには、データ数が必ずしも十分でないことによる‘ゆらぎ’を感じさせられる。中2では、パターンＢが最も高いというやはりややイレギュラーな結果を示しているが、3つともに低いパターンＨで最も「読解力」スコアが低くなっている。全体として、教育力のバランスが崩れるほど（×が多くなるパターンほど）、子どもの「読解力」は低下する傾向が現われており、前述した仮説の検証はめどが立ったと言えよう。

以下で、この図表をもう少し詳しく見てみよう。

1 小5では、「学校の経営力」の果たす役割が顕著

教師の指導力と家庭の教育力が同じパターンのＡとＢ（○○－）、ＣとＥ（○×－）、ＤとＦ（×○－）、ＧとＨ（××－）の4つのグループでは、小学校では、例外なく、学校の経営力が平均以上（○）のパターンのほうが子どもの「読解力」スコアは高く、学校の経営力の果たす役割の大きさがうかがえる。前回の報告書で、学校の経営力は、主として教師や家庭への働きかけを通して子どもの学力に影響を及ぼす（言い換えれば、学校の経営力は媒介変数的な力として子どもの学力に作用する）という見解を述べたが、同じ教師の指導力と家庭の教育力のパターンであっても、学校の経営力の差により子どもの学力に差が生じるのはなぜであろうか。この点について、前回の報告書で筆者は次のような見解を述べた－「経営力の高い学校では、教育目標を明確化したり、それを教師間や保護者と共有化したり学力向上のＰＤＣＡの推進体制を整備するなど、学校としての組織的な取り組みが行われている度合いが高く、教師個別の指導力のレベルは同じであっても、学校全体としての組織的な教育力に差が生じていることが主として考えられる。また、子どもと校長との日常的な接触を通して、子どもに直接与えている影響の違い（＝校長の直接的な教育力の差の影響）も小さくないのかもしれない。」－今回についても、おそらく同様な事情が存在していると推察する。ただ、中学校については、ＤとＦ、ＧとＨの間では、学校の経営力が平均以上のほうが子どもの「読解力」は高いが、他の2つの組み合わせでは逆転しており、これをどう解釈するかは課題として残った。

2 小・中学校ともに「家庭の教育力」の影響は大きい

次に「家庭の教育力」の影響の現われ方を見てみよう。教師の指導力と学校の経営力が同じパターンのAとC（○－○）、BとE（○－×）、DとG（×－○）、FとH（×－×）のグループの間では、小・中学校ともに例外なく、子どもの「読解力」は「家庭の教育力：○」＞「家庭の教育力：×」という関係を示している。これは前回調査で報告した教科学力の場合についてと同様である。この差異は、小学校では、BとE（○－×）（教師の指導力は平均以上だが学校の経営力が平均未満）、中学校では、反対にDとG（×－○）（教師の指導力は平均未満だが学校の経営力が平均以上）というパターンでそれぞれ最大となっている。いずれにしても前節で見た「家庭の教育力」の影響を再確認できる。

3 小・中学校で「教師の指導力」発揮の効果の現われ方が異なる

最後に、「教師の指導力」の影響の現われ方を見てみよう。家庭の教育力と学校の経営力が同じパターンのAとD（－○○）、BとF（－○×）、CとG（－×○）、EとH（－××）についてみると、小学校ではEとH（－××）を除く他の3つのグループ、中学校ではAとD（－○○）を除く他の3つのグループで、子どもの「読解力」は、「教師の指導力：○」＞「教師の指導力：×」という関係になっている。このように、スコアが逆転する解釈の難しい現象も一部にあるが、子どもの「読解力」育成に対する教師の指導力発揮の効果を確認できる。この格差は中学校で大きく現われる傾向を示しており、B（○○×）とF（×○×）の間では、偏差値で5.9ポイントに及んでいる（小学校は、同じBとFとの間で0.5ポイント、最大はAとDとの間で2.1ポイントとなっている）。

以上のデータと分析に対して、学力向上に学校経営の立場で継続的に取り組んでおられる東京都北区立赤羽小学校校長の岩津泰彦先生から、学校の取り組みの紹介とも合わせてコメントをいただく。

本節のテーマとデータ・分析を受けて

家庭と連携した「読解力」向上の取り組み

東京都北区立赤羽小学校長　岩津 泰彦

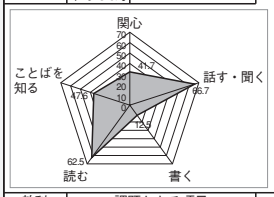
◆１．はじめに

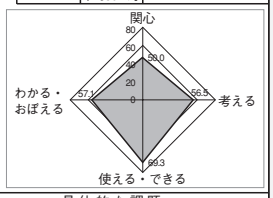
本校では、総合的な教育力を高めるために、地域や家庭との連携に重点を置いて様々な取り組みを推進している。家庭との連携を進める前提となる大切なことは、何と言っても徹底した説明責任を果たすことと学校理解のための学校公開を拡大することであると言えよう。本校においては、年度はじめに学校説明会と称して、学校経営計画、各種の教育活動、本校における学力の定義と考え方、児童の実態等々の詳細な説明をして、その中で家庭との連携の重要性を訴えている。また、学校公開は、授業参観はもとより、研究授業や各種行事、ショートの集会やイベントも含めて年間40回以上の公開を実施している。さらに、保護者からの学校に対する評価や意見をアンケートで求めて、その結果を分析して学校改善に生かすように努めているところでもある。それらの活動を基に、家庭に対して学力の基盤は基本的な生活習慣と日常的な学習習慣の確立であるという共通の認識をもってもらうようにしている。これらは家庭の協力なしには実現しないものである。基本的な生活習慣として、早寝・早起き・朝ご飯、返事・挨拶・後始末等々の徹底を依頼し、日々の学習習慣の確立として、宿題を毎日出すので、子どもへの確認や賞賛の声かけ等の協力を求めている。そのことにより、家庭の関心を高め子どもたちの意欲の向上を図るようにしているのである。学級担任からは、子どもと保護者の双方に、一週間の学習予定表を配布して、その週の学習内容を知らせるとともに、学習の見通しをもたせ宿題の確認ができるように工夫している。その中で、自主学習を促したり、各種カード等への家庭からのコメントを求めたりして、家庭との具体的な連携を図っているところである。

◆２．学力向上に関わる取り組み

本校の「学力向上のための基本調査2006」における保護者の学校に対する総合的満足度は、「この学校に子どもを通わせてよかったと思う」が92.8％（受検校全体88.5％）であり、「この学校は、これからもよくなっていくと思う」が92.7％（受検校全体81.1％）であった。中でも、「よくあてはまる」の評価は、各々60.3％（受検校全体29.6％）、50.7％（受検校全体22.4％）で受検校全体の平均に比べると高い満足度となっていた。また、「学力向上の取り組みの推進状況の認識」「（学校の取り組み成果としての）子どもの変容」についても概ね肯定的で満足度は高い。さらに、家庭の教育力に関する項目もＤＩＰの三領域とも比較的高い状況にある。本校の学力向上への取り組みは、前回の報告書にあるように、『学力向上アクションプラン21』と称するプランを策定し、21項目の方策を基礎にした学力向上推進プランを実施している。今年度は、それに加えて学力テストの結果等を参考に児童の日々の実態把握に努める中で、『基礎学力向上のための個別指導計画』の作成に取り組んだ（右図）。国語と算数について個別の指導計画を策定して個に応じ

基礎学力向上のための個別指導計画		平成18年度		北区立赤羽小学校
6学年	1組	No.○○	児童名　○○　○○	担任名　○○　○○
学力テストの結果		テスト名	東京都　北区　ベネッセ	18年４月実施
国語	市区町村平均73.6%	個人の平均 50 %	算数	市区町村平均80.1%　個人の平均 64.3%





教科	課題となる項目		具体的な課題
国語	話す・聞く	書く	文字の表記が非常に乱雑で、書き誤りが多い。教科への苦手意識が強く、取り組みが継続しない。主体的に自分の考えを文章化しにくい。
	読む	ことばを知る	
算数	数と計算	量と測定	図形に関する視覚認知が弱く、作図などの作業は支援が必要。突出するほどではないが、学びの積み重ねや理解の全般が難しい。
	図形	数量関係	
その他	手先が不器用で、体全体のバランスがよくない。 苦手意識が強く、自己評価が低い。自己肯定感も低い。		

今年度の目標	学習習慣を身に付け、スモールステップで課題に取り組み、達成する中で自己評価を高める。

教科	課題を達成させるための手立て	具体的な取り組み
国語	文字の習得については、覚えやすい学習の仕方を見つけ、段階に合った個別の課題を設定する。新出漢字表を用いて、視覚的に漢字の習得状況を捉えられるようにし、意欲につなげる。	個別指導
算数	算数的な活動に取り組む際には、道具の扱いのこつや手本を個別に指導する。活動に見通しがもて、意欲が高まるようなら、自主性を尊重する。復習の機会を定期的に設け、基礎・基本の定着を図る。	個別指導 算数教室
その他	学習の見通しを伝え、できたことをほめ、苦手意識を取り除く。 保護者には、なるべく学校での良い活動を伝達し、児童への建設的な声かけ、肯定的な学習の支援につながるようにする。	電話・連絡帳での連絡面談の設定

学期の目標に対する評価と次学期に向けての課題	その時々で、重点的に取り組む課題を意識できるような声かけと、常に学習に向かう継続的な課題とを設定し、学習が習慣化してきた。自主的に取り組む姿勢も見られるようになったので、頑張りをより認め、自己評価を高められるようにする。

た指導への手だてとしたものである。また、夏季休業中に学力テストの結果や個別指導計画を基にして、保護者との個別面談(学習相談会)を実施し、学力向上に関する家庭との共通理解を図るとともに協力を依頼し、各種の働きかけを行った。

◆３．「読解力」育成に関わる取り組み

前述したように、本校における学校の取り組みに対する保護者の満足度は比較的高い。他方、教員の自己評価は、項目によってバラツキが大きいが、学力向上の取り組みの成果認識は高い。「読解力」向上についての学校としての取り組みの設問では、学んだことを実社会に適用する場や機会の創出などで課題を感じているものの、カリキュラム開発、情報活用計画、意欲の喚起、学び合う集団形成について、概ね取り組んでいると回答している。本校での「読解力」育成に関わる主な取り組みを以下に紹介する。

①「自分の考えをもち、伝え合う」コミュニケーション能力育成を目指した研究

この研究は、平成16・17年度の２年間、北区教育委員会の研究協力校として取り組んだものである。コミュニケーションには、論理的思考と問題解決に重点を置く「効果的に情報をやりとりするコミュニケーション」と、一人ひとりの思いや考え、感情に重点を置く「人間関係を形成するためのコミュニケーション」の２つの側面がある。この２つの側面では発揮されるべき能力には、「反論されても感情的にならない」「相手が正しければ潔く自分の意見を変える」と言った「情意的要素」、話す技能・聞く技能・話し合う技能という「技能的要素」、および、相手の考えを論理的に理解し、それに対する自分の考えを持つといった「認知的要素」の３つの要素がある。これらをバランスよく育成していくことが大切であるが、本校の研究では、とくに研究の副主題として重点を置いて取り組んだのが「自分の考えをもち、伝え合う力」の育成である。これは、「読解力」育成とも本質的に関わるテーマである。このテーマを、体育科を含む全教科・全領域を通して指導計画を作成し具体的な手立てを考えて追求してきた。例えば、体育科では、友達と互いの技を見合い、アドバイスし合いながら練習を進めることで、一人ではなかなかできなかったことができるようになったり、お互いの技を高め合うことができたりするような光景が生まれている。「読解力」向上に一層つながっていくように、この研究の成果を継続的に引き継ぎ、深めていきたいと考えている。

②家庭と連携した音読の会、読み聞かせの会

音読の会とは、国語の教科書などにある幅広い範疇の読み物を暗記し、場面を想像したり意味を考えたりしながら音読させたり、グループごとに群読させたりするものである。高学年では、これに併せて有名な詩や短歌を暗誦して朗読する活動も行っている。字面を追うだけの棒読みにならないように指導して、低・中・高学年ごとに全体の前で発表するものである。それらの活動は保護者にも公開するとともに、音読カードを作って保護者に感想や意見を求めたり、家庭での取り組みを促したりしている。音読は、声に出すことによって場面を想像し作者や登場人物の気持ちを考えることができるようになる。家庭学習の場では、保護者が教科書を開き、子どもが暗記した文を暗誦するような取り組みも数多く見られ、家庭との連携が深まるとともに保護者の意識の向上も図られる。一年生では『大きなかぶ』、二年生では『スィーミー』『スーホーの白い馬』が人気で全文暗記する児童も数多くみられる。音読カードへの保護者のコメントは、「話の内容がよく分かるようになりました。続きが早く聞きたいです」「話の内容は知りませんが、子どもには人気のある本らしいです。読書が良い習慣になればよいと思います」「音読がきっかけになり、学校の出来事や図書室で借りた本のことなど、いろいろな話をしてくれるのがとても楽しいです。今度は図書館に行きたがるようになりました。」といった感想や希望を述べたものであるが、児童にとっては励みになっているように思われる。

低学年にあっては、朝の時間を活用して絵本や紙芝居を読んで聞かせる、『読み聞かせの会』を実施している。読み手を希望する保護者や読み聞かせグループ、図書館職員等に依頼して交代で教室に来てもらう。また、朝会時に校長も含む全教員による『全校お話の会』を年間三回実施している。これは、前もって読む本の題名と読み手を一覧にしておき、全児童がどの話を聞くかを選択するのである。従って、異なった年齢の児童が分かれて話を聞くことになる。教員によっては、影絵を作ったり、衣装に工夫を凝らしたりして雰囲気作りをしている。その後、感想や気持ちなどをカードに書いてまとめるという会である。

③学習相談会の開催

夏季休業中に全クラスで全保護者を対象とした学習相談会を開催している。学力テストの結果や基礎学力向上のための個別指導計画の説明をして、教育課題としての表現力・「読解力」の育成やコミュニケーション能力の育成等について保護者との意見交換をして共通認識をもつようにする。ともすれば、友人関係を含めた生活指導が中心であった個人面談とは別に学習に限った相談会を開催することによって、教員から「読解力」の育成についての方針や方策が説明でき、保護者の学習に関する考えや協力の度合いも判断できるようになった。それらを更に個別指導計画に追記することにより、個に応じた指導がより綿密に立案できることになる。

◆４．今後の課題

以上の取り組みの共通する課題は、統計的にきちんと成果を実証していくことである。簡単には成果が上がらないものもあるが、今後、学力調査や意識調査を通して、成果と課題を明らかにして年々積み上がる取り組みとしていくことである。つまり、ＰＤＣＡサイクルをきっちり回していかなければならない。これを推進していくのはもちろん「学校の経営力」の役割であり、校長の務めであろう。

また、今後、すべての教科や活動を通して、学年段階に応じた「読解力」向上の方策を一層充実させていく必要があると考えている。

◆５．データ分析を受けて－「総合教育力」のパターンと「読解力」との関連について

今回の分析を見ると、「学校の経営力」の大きさによる差がやはり顕著に現われている。学校が組織として、「読解力」向上のための様々な取り組みをして、それらを評価し改善していく、そのＰＤＣＡの動きが教師の取り組みを充実させ家庭の教育力をも向上させていくものと考えられる。また、家庭の教育力の影響は大きいとの結果は、我々が日頃感じていた、教育力の高い家庭の児童は、「読解力」が高いようだ、本に対する興味が高く知識も豊富である、といった漠然とした感想をデータとして示してくれたと言える。教師の指導力については、一部に逆転現象はあるものの概ね教師の指導力の高いグループが「読解力」が高い結果となっている。予想された結果ではあるが、教師といっても年齢や指導力の差が大きいので、これらをバラツキなく高めていくためには学校としての組織的な取り組みが必要であり、「学校の経営力」が問われると言える。また、家庭と連携し家庭の教育力を高めていくに当たっては、各教師の「学級」経営力を高めなければならず、その意味でも校長の確固としたリーダーシップが必要であることを改めて示していると言えよう。